

荒木経惟の『私小説』

写真は一般的な出来事を大量に、効果的に伝達するメディアとしては、テレビなどくらべてやや時代遅れになりつつあるように思えます。しかし、逆に個人的な行為や経験を寄せ集め、あるまとまった形に組織してさし示すメディアとしては、ますます独特な力を発揮しはじめているのではないで

しょうか。社会的なドキュメンタリーではなく、いわば私的（プライベート）なドキュメンタリーとでもいうべき領域の可能性です。そこでは、写真家自身の生と彼が撮影した写真とは、わがちがたく結びついて切り離すことができません。しかし、その私的な出来事が、時にはわれわれを呆然自失させ、生の意味を一変させてしまうようなことさえおこります。

たとえば、この写真（71）は荒木経惟の写真集『センチメンタルな旅・冬の旅』（新潮社、一九九二）にまとめられている一枚です。荒木は一九七一年に同じ会社勤めていた七歳年下の青木陽子と結婚します。この時の京都・九州への新婚旅行のプライベートな記録写真を集めたのが、彼の実質的なデビュー写真集となる『センチメンタルな旅』（私家版、一九七二）でした。その序文にあたる文章で、荒木は「写真家としての出発を愛にし、たまたま私小説からはじまったにすぎないのです。もともと私の場合ずっと私小説になると思います。私小説こそもともと写真に近いと思っていますからです」と書いています。この『私小説宣言』の通り、彼はそれ以後ずっと陽子との私生活を撮影し続けてきました。

ところが、一九八九年に陽子が悪性の子宮肉腫で入院し、闘病生活がはじまります。『センチメンタルな旅・冬の旅』の後半部分、「冬の旅」のパートは、それから九〇年一月二十七日の彼女の死に至る日々、さらにその後も含めた写真日記の体裁を取っています。このような日付入りコンパクトカメラで撮影した写真を並べていくやり方は、一九八〇年に刊行された『荒木経惟の偽日記』（白夜書房）以来のものです。この時は、タイトルが示すように、カメラの日付表示を勝手にいじって、でたらめな順序で写真を並べるなど、虚と実の境を曖昧にして見る者を惑わすような工夫がされていました。しかしこの「冬の旅」ではそんな「遊び」の部分はすべて切り捨てられ、陽子との最後の日々がストレートに記録されています。

この写真は臨終の前日の夜中に撮影されたもので「手指をにぎりしめると、にぎりかえしてきた。お互いにいつまでもはなさなかった」という悲痛なキャプションが添えられています。互いに握りあう手の、力のこもった仕様に、このたぐいまれなカッパルの二十年以上にわたる生の歴史が凝縮しているといえるでしょう。

陽子と生きた日々、そしてその死は、たしかに荒木にとってぬきさしならぬ私的な出来事として記録されました。この写真日記の全体も、あくまでも彼と陽子とのプライベートな関係の中で成立している。しかし、それを見るわれわれ読者の一人一人が、愛する者の死を巡って自問自答せざるをえない地点に追いこまれるように感じてしまうのも事実です。いわば「冬の旅」に登場する陽子のイメージは、荒木にとつての最愛の女性「ヨコ」としてだけでなく、われわれ一人一人に開かれた、普遍的とさえいえるような姿でよみがえってくるわけです。彼自身の生と密着した私的な出来事が、個

別的な関係を超越した輝きを帯びはじめるとのこと。ここで想い出すのは、先に引用した「より特殊で、より個人的であればあるほど、その写真というのはある普遍性を持つ」というダイアン・アーバスの言葉です。どうやら写真にはそんな不思議な力が備わっているらしい。

⑦——荒木経惟「冬の旅」(一九九二)より

